

夜の二十二時過ぎ。いつもと同じ帰宅電車の中。

都心から郊外へ向かうこの路線は、終電近くになっても身動きが取れないほどの人で溢れる。くたびれた背広の匂い、アルコールの気配、疲れた誰かの浅い寝息。

今日もドア横の定位置を確保して、周囲の人にサンドイッチされる形で立っていた。

（はぁ、今日も疲れた……）

鞆を胸の前に抱え直しながら、僕はぼんやりと窓の外を見た。暗い車窓に、僕自身の疲れた顔が映り込んでいる。

今日はまだ水曜日。週末までは遠い。憂鬱な気分が肩に重くのしかかる。

電車がガタンと大きく揺れて、後ろに立っている誰かの胸が僕の肩甲骨のあたりに軽くぶつかった。

「失礼」と落ち着いた低い声が聞こえて、それきり静かになる。

帰宅ラッシュでは日常茶飯事だ。僕も気にせず前

を向いた。

ふと、背中に誰かの手が触れている気がした。

「……？」

揺れで押しつけられているだけかもしれない。そう思って僕はスマホを見るふりをしながらやり過ごそうとする。けれど、手の感触は電車の揺れとは無関係に、ゆっくりと僕の背中を滑っていた。

肩甲骨の間から腰にかけて、指先が、なぞるように動く。

(気のせい……じゃ、ないかも……)

僕は少しだけ首を横に向けて、視界の端で背後の気配を探る。

すぐ後ろに立っているのは、濃紺のスーツを纏った長身の男性だった。

年齢は二十代後半だろうか。切れ長の目、薄い唇、ヘアワックスで整えられた黒髪。知的な雰囲気醸

しながら、手元の文庫本に視線を落としている。

（この人、が……？）

この路線で、毎晩同じ時間帯に見かける会社員だった。

電車内で席を譲り、落とし物を拾えば必ず追いかけて届ける、あの紳士的なエリート。こんな人が、まさか。

（ないない。こんな真面目そうな人が、痴漢なんてするかな……。それに、そもそも僕は、不感症だしな……）

僕はまだ、一度も「いった」ことがない。

僕は男として生きている。けれど身体には、女性器がある。いわゆる、カントボーイだ。

自分で触れても、身体はどこか他人事のようにぼんやりとしていて、快感というものが遠い星の話みたいに思える。

(どうせ触られたところで、僕は不感症だし……)

だから、大丈夫。

僕は自分にそう言い聞かせて、視線をスマホに戻した。

その瞬間、また背中に触れる感覚。今度ははっきりとわかった。スマホの画面越しに、男の腕が動いたのが見えた。指先がパーカーの薄い生地越しに、僕の背中を這っている。

(やっぱり……)

心臓がドクンと大きく跳ねた。

手のひらにじわりと汗が滲む。振り返るべきだろうか。声を上げるべきだろうか。頭のなかで警告音が鳴っている。けれど、身体は動かない。

いくら感じないとはいえ、知らない人に触られるのは不快ではあった。

(どうしよう……)

僕は必死に自分を落ち着かせる。

（ここで、痴漢ですって騒いでも、僕も後ろの人も男だし。大事になると面倒だしな……）

大丈夫。僕は不感症なんだから。なにをされても感じない。ただ触れられているだけ。ちょっと気持ち悪いのを我慢すれば、あと三駅で降りられる。それだけのことだ。

（我慢。我慢すればいいだけ……）

そう自分に言い聞かせている間にも、背中を這う指先はゆっくりと下降していった。パーカーの裾のあたりまで到達すると、その手はためらいなくジーンズの上に移動する。薄い生地の上から、僕の腰のラインをなぞるように動いた。

電車が駅に停車する。

ドアが開き、数人が降りて、また数人が乗り込ん
でくる。人の入れ替わりで一瞬密着が緩んだけれど、

次の瞬間にはまた密度が戻る。背後の気配は変わらない。あの紳士然としたスーツの男は、まだ僕の後ろに立っていた。

（まだ続ける気なのかな……）

もう一度、僕は視界の端でちらりと後ろを窺った。彼は相変わらず文庫本に目を落としていた。片手で本を持ちながら、もう片方の手は、見えない。

指先は僕のジーンズ越しに腰のラインを、円を描くようにゆっくりと撫でていた。まるで生地質感を確かめるかのように、丁寧な、慎重に。

「っ……」

（気持ち悪い、気持ち悪いけど……）

降りる駅まであと少し。少しだけ耐えれば、僕は家に帰れる。

その指先は太ももの外側から内腿へと、まるで地図を描くように丹念になぞっていく。